

2-3 世紀「東ユーラシア」の中の嶺南・北中部ベトナム地域 －士燮・孫呉時期の交州地域史－

新津 健一郎

はじめに

前漢後半期から六朝にかけて、嶺南（現広東・広西）・北中部ベトナム一帯は「交州（交趾）」という監察行政区に編成された⁽¹⁾【地図 1】。秦末以来、この地域は南越国（国都は現在の広州市）の支配下にあったが、漢の武帝は元鼎 6（前 111）年に同国を滅ぼし、その故地に南海・蒼梧・鬱林・合浦・交趾・九真・日南・珠崖・儋耳の 9 郡を設置した（うち珠崖・儋耳の 2 郡は後に放棄）。これらを管轄する監察行政区として設けられたのが交州（交趾）であった。

各王朝にとって交州（交趾）は境域の最も南に位置する監察行政区（州）であった。都からは遠く離れ、山地や水上・海浜には「漢人」と言語や生活文化を異にする原住民が多く暮らしていた。国家の支配を逃れ、あるいはそれに抵抗する者も多く、後漢初期の徴姉妹反乱（42-43）をはじめ、1-2 世紀に限っても 14 回の「反乱」が史籍に残る⁽²⁾。190 年代には、日南郡で県功曹の区連が県令（地方長官。功曹にとって上官にあたる）を殺害してベトナム中部に自立し、のちに林邑（チャンパー）と呼ばれる王国を形成した⁽³⁾。同じ時期、ベトナム南部・カンボジア一帯では扶南（1-7 世紀頃）が強大化し、交州はこれらの諸国家と接触する窓口の性格も帯びた。

ここに見える古代国家及びその行政区は、中国・ベトナム、さらにカンボジア・ラオスといった現代国家とは空間範囲を異にする。交州の場合、領域はほぼ現在の嶺南・北中部ベトナム（ベ

(1) 「州」（州部）は当初、行政区（郡・県）に対する監察区として設けられ、のち事実上の広域行政区となった。漢代の州は概ね「某州」と呼ばれたが、交州に限って「交趾」と称された。長官も、他州は「某州刺史」であるのに対して「交趾刺史」であったが、2 世紀末に「交州」と改称された。境域は、はじめ嶺南・北中部ベトナム全域を包括したが、3 世紀に嶺南一帯が分離された（本文後述）。本文では、名称変更の前後にわたり嶺南・北中部ベトナム一帯を指す場合には交州（交趾）などと表記する。

なお、交趾（州部）・交趾郡とも、「趾」を「趾」に作る史料があるが、本稿では引用を除き「趾」に統一する。
(2) 西村昌也「ベトナム形成史における“南”からの視点：考古学・古代学からみた中部ベトナム（チャンパ）と北部南域（タインホア・ゲアン地方）の役割」（『周縁の文化交渉学シリーズ』6、2012 年）、138 頁参照。前漢時代については史料に乏しい。

(3) チャンパー王国自体は王朝交代を経ながら大越国の時代まで存続した。漢籍では、当初は「林邑」、9 世紀以後には「占城」と表記される。5 世紀以降、サンスクリット語・チャム語碑文が多く刻まれるが、本稿で取り扱う時代に関してはチャンパー側独自の文字史料は知られないため、原則として「林邑」と表記する。山形眞理子・桃木至朗「林邑と環王」「南海交易ネットワークの成立」（山本達郎責任編集『岩波講座東南アジア史 一 原史東南アジア世界』岩波書店、2001 年、所収）参照。なお、チャンパー・扶南に関しては *Lâm Thị Mỹ Dung, Sa Huỳnh Lâm Ấp Chăm Pa. Nhà xuất bản Thế giới, 2017* 及び *Lương Ninh, Vương Quốc Phù Nam. Nhà xuất bản Văn hóa Thông tin, 2005* などもある。

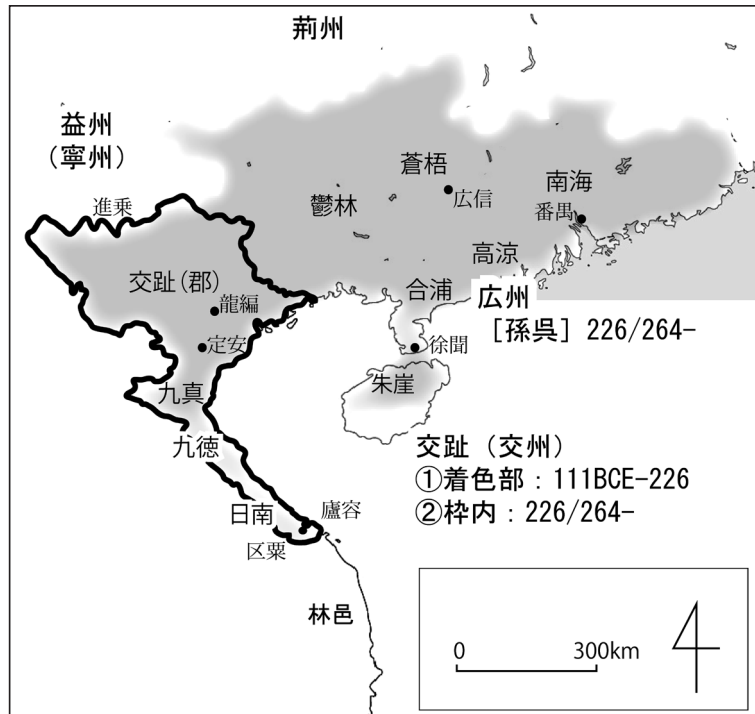
トナム社会主義共和国の首都・ハノイを含む)にあたり、3世紀に嶺南一帯が広州として分離されたことで、現在の中越国境にほぼ相当する行政境界が画された。とはいえ、北中部ベトナム側(交州)とチャンパー・扶南とが直ちに一体化したわけではない。9世紀以降、北部ベトナム一帯を拠点とする大越国が勢力をのびし、曲折を経て阮朝時代(1802-1945)に形成した版図が、地理空間の上でほぼ現代ベトナムの前身となった。

それゆえ、交州に対す

る歴史的認識は中国王朝史、大越国-ベトナム史あるいは東南アジア史など視座により大きく異なる。例えば、中国王朝の中の交州(交趾)は前記の通り最南の監察行政区であった。「叛服常無い」人々が暮らす一方で対外窓口となる地域であったが、こうした現象そのものは他方面の辺境にも観察される。一方、ベトナム国家史として見れば、この時期の北中部ベトナムとは北属 Bắc thuộc、つまり中国の支配下にあったということになり、徴姉妹 Hai Bà Trưng らはそれに抗した英雄とされる。また、林邑や扶南の成立を東南アジア古代国家の形成と見るならば、交州は同時期にそうした国家形成に至らなかったということにもなる。

以上のような複雑さに、史料の乏しさ、さらに同時代の国際関係も相俟って、唐代以前の交州(交趾)に対する実証的歴史研究はこれまで必ずしも充実を見なかった。特にベトナムでは、「北属」のネガティブなイメージのゆえに関心も高くなかったようだが、近年、昇龍(タンロン Thăng Long)城遺跡をはじめ考古調査の活性化を背景に、こうした状況には変化が萌しつつある。

本稿ではこうした研究状況を踏まえ、「東ユーラシア地域論」というテーマの下、「国家」の中の地域・「国家」を超えた結びつきの2点に注目して2-3世紀の交州(嶺南・北部ベトナム)地域について述べる。この時代、後漢帝国が解体していくなか、その各地には地方軍閥・政権が生まれた。交州では士燮(137-226)なる人物が自立的勢力を形成し、のち三国呉(以下、孫呉と呼ぶ)の支配下に入った。漢帝国の解体と三国の鼎立という政治状況は、境界地域に対する王朝



地図1 交州各郡・主要県図(筆者作図)

・便宜上、海岸線・陸側境界線は現在の海岸線・行政境界に準じ、対象となる空間を塗りつぶしによって示した。

国家の接し方にどのような影響を与えただろうか。他方、林邑・扶南といった東南アジア諸国の形成・強大化は中国王朝の辺境にいかなる影響をもたらしただろうか。さらに、こうした「外部」の動きと、交州地域内の社会とはどのように関わっていただろうか。これらの問題について、先行研究の再検討を行っていく。

第1章 士燮・孫呉期交州への視線

(一) 交州地域史の史料をめぐって

2-3世紀の交州地域史を論じようとするとき、基本史料となるのは陳寿『三国志』(3世紀後半)・范曄『後漢書』(5世紀)・酈道元『水経注』(6世紀)・『(唐修)晋書』(7世紀)などの漢籍である。ただし、『三国志』を除けば成立年代がやや下ること、また『三国志』・『後漢書』・『晋書』などはいずれも中国王朝の歴史書として編纂されたことには注意が必要である。交州のような辺境地域がこうした書物に現れる場合、征服や反乱・鎮圧など中央の視点に立った記事であることが多い。むろん、史書の地理志や『水経注』には地誌・民族誌的記述も見えるが、辺境に関しては情報が希薄、あるいは誤りを含む傾向をなしとしない。それゆえ、書籍自体のバイアスに留意することに加え、別系統の文献との照合や考古資料の利用が必要となる。

一方、ベトナム漢籍・漢喃文献の中にも2-3世紀の交州地域に関する言及を含むものがある。代表的かつ早期のものとして呉士連『大越史記全書』(15世紀。13世紀の黎文休『大越史略』などをもとに編纂)の「外紀」が挙げられる⁽⁴⁾。同書は丁朝(10世紀)以降を本紀、上古から丁朝までの出来事を外紀として記述する。もっとも、外紀の大部分は上に挙げたような漢籍の引き写しや抄録だが、一部に独自の内容を含む。例えば、外紀3・士王紀には士燮が王と呼ばれたことや、後漢献帝期に「越人李琴」が司隸校尉となったことの記述がある⁽⁵⁾。しかし、そうした記述を別系統の史料によって証拠立てることは困難であり、成立年代が下ることも加味すれば、むしろ後代に紅河デルタ一帯で成立した説話・伝承を反映したものである可能性が高い。従って、本稿で扱う時代について『大越史記』及びそれに続く大越国内の典籍を史料として利用することは難しい。

ただし、こうしたベトナム漢籍・漢喃文献が2-3世紀の交州地域に向ける視線については留意する必要がある。『大越史記』の場合、南越国滅亡後の外紀は概ね「属西漢紀」など中国王朝名に「属」字を付して篇目を立て、その間に「徵女王紀」・「士王紀」・「前李紀」・「趙越王紀」・「後李紀」を挿入する格好となっている。後者は概ね自立的勢力を形成した者や中国王朝に対する「反乱」の指導者であり、中国王朝の支配とそれに対する自立・抵抗を「属某王朝」紀と対比的に示

(4) 同書は李・陳・黎朝(11世紀-)大越国史の基本史料である。文献的性格は桃木至朗『中世大越国家の成立と変容』(大阪大学出版会、2011年)、17-19頁参照。本稿での引用は陳荊和編校本(東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1984-1986年)による。

(5) 【王について】「王器禮寛厚、謙虚下士、國人愛之、皆呼曰王。漢之名士避難往依者以百數。」【『三国志』卷49士燮伝相当箇所】「燮體器寛厚、謙虚下士、中國士人往依避難者以百數。」【李琴に関するくだり(結尾)】「則我越人才得與漢人同選者、李琴・李進有以開之也。」なお、李琴については黎崱『安南史略』(14世紀)にも見える。

している。その中で、士燮は「王」に位置づけられ、さらに評語には「我が國、詩・書に通じ、禮・樂を習いて文獻の邦と爲るは、士王より始まる（我國通詩書習禮樂爲文獻之邦、自士王始）」とされるのである。

かつて、後藤均平氏は古代ベトナム史を論ずる中で、中国史籍をもとに士燮の事績を復元するとともに、ベトナム漢籍を利用して後代の「士王」像を論じ、両者を結び付けて「士燮政権は外来の守任と異なる在南土着的勢力」であり、「越南社会と密着するその性格を持つが故に、越南社会では士王が成立し、社会の遺産として伝え続けられ」たと指摘した⁽⁶⁾。しかし、氏自身も論及するように、交州で自立傾向を示した地方官は他にも三国末・西晋の陶璜や劉宋の杜慧度などが知られる。陶璜や杜慧度は、『大越史記』の叙述では「属呉」・「属晋」に含まれるが、これについては18世紀・西山朝の呉時仕が既に疑問を呈している⁽⁷⁾。

後藤氏は呉時仕のコメントを大越国の政治情勢に由来する問題として処理するのみであるが⁽⁸⁾、近年、ベトナム・バクニン省 tỉnh Bắc Ninh では4世紀に刻された陶璜の顕彰碑が確認されるとともに⁽⁹⁾、同碑とともにトゥアンタイン県 huyện Thuận Thành に所在するルンケー（ルイロウ）古城遺跡 Thành Cổ Lũng Khê (Luy Lâu) でも発掘調査が進み、漢系遺物・在地系遺物の混在といった状況が指摘されている⁽¹⁰⁾。同遺跡は士燮の時代以降紅河デルタ地域の政治的中心であったとみられる⁽¹¹⁾。たしかに陶璜は『大越史記』やそれに続く大越国内の文献において「士王」のごとく大きく扱われているわけではないが、20世紀末に公開されたフランス極東学院作成の資料によれば、トゥアンタイン県内の村落には1930年代の時点で陶璜に関する伝承・祭祀が行われていたという⁽¹²⁾。以上のように、交州地域史に関しては同時代的実態・後代の言説の両面で史料状況が変化しつつある。こうした状況に鑑みれば、既知の史籍についても再検討の必要が高まっているといえよう。

(二) 2-3世紀の交州地域に関する先行研究

本稿では、2-3世紀における交州地域の実態に絞って検討を行う。同様の主題を扱った研究と

(6) 「士燮」『史苑』32(1)、1972年、24頁。のち同『ベトナム救国抗争史：ベトナム・中国・日本』新人物往来社、1975年、所収。

(7) 『大越史記前編』巻3、14a-b。

(8) 前掲論文23-24頁。陶璜は『晋書』巻57本伝によって「外来官僚の支配」(25頁)とし、下って杜慧度らは「土着的」であったとする(同「交州土着刺史：4・5世紀の越南」『歴史学研究』394、1973年)。

(9) ファム・レ・フイ Phạm Lê Huy「ベトナムにおける新発見の陶璜廟碑」新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』勉誠出版、2018年、所収。新津健一郎「ベトナム・バクニン省所在陶列侯碑と三国・西晋期の交州社会」『中国出土資料研究』22、2018年。

(10) 西村昌也「紅河デルタの城郭遺跡 Lung Khê 城址をめぐる新認識と問題」『東南アジア 歴史と文化』30、2001年。のち同『ベトナムの考古・古代学』同成社、2011年、所収。張得戦 Trương Đắc Chiến (範氏秋江 Phạm Thị Thu Giang・新津健一郎訳)「2014年ルイロウ古城発掘調査の新発見」黄曉芬・鶴間和幸編『東アジア古代都市のネットワークを探る：日・越・中の考古学最前線』汲古書院、2018年、所収。

(11) 西村前掲書167-176頁(前掲論文加筆再録)参照。

(12) ベトナム社会科学図書館 Thư viện Khoa học xã hội (社会科学情報院 Viện Thông tin Khoa học xã hội)所蔵「神跡神勅 Thần tích, Thần sắc」làng Thanh Hoài [TTTS 2959], làng Đại Tự [TTTS 2942], いずれも1938年調製。資料の性格は宇野公一郎「漢喃研究院『社村名による神跡索引』：社会科学通信院『神跡・神勅書目』(『ベトナムの社会と文化』1、1999年)を参照。

してまず挙げられるのは、前出の後藤氏が1970年代前後に集中的に公刊した論考であり、それに続く格好でいくつかの論考がある⁽¹³⁾。本節では、主な知見について簡単に整理を加え、次章以降の論点を示す。

はじめに後藤前掲論文のうち土變「政権」の実態に触れた部分を要約すれば、次のようになる。土變は在地有力者の支持とインド商人を含む南海交易の掌握を基盤に、単なる地方長官（郡太守）の権力を超えて地方政権を築いた、このような土着的性格は地方長官として異質のものであった⁽¹⁴⁾。すなわち、後藤氏は土變の影響力に現地との密着を見出し、特殊な性格を持つと評価するのだが、このうち経済的側面に関しては、沿岸貿易路線の把握を想定するにもかかわらず東南アジア方面との接触について言及を欠く。

この点に関わって、桜井由躬雄氏は、農学的知見を含めて古代東南アジア一帯の交易路を復元する中で次のように述べた⁽¹⁵⁾。漢帝国の下、交趾郡（紅河デルタ一帯）では早くから自然堤防地帯の開発が進み、在地首長（雒侯・雒将）を通じた間接支配が形成された。南海郡（広州市一帯）と日南郡（中部ベトナム）の中継点、かつ雲南方面と連絡する紅河ルートのターミナルであった。土變の政権はこれらを掌握して成立し、2世紀末東南アジア地域の政治化の中に位置づけられる。同時に、林邑が成長したことで中部ベトナム沿岸のネットワークが組織化され、南シナ海海上交通路における主要港市の地位を日南郡と争った。

ただし、桜井氏は土變政権あるいは交州（ないしその中心としての交趾郡）のみに焦点を当てて検討を行ったわけではない。その後、川手翔生氏は『三国志』に見える交趾郡の産物に注目し、その大半が土變自身、あるいは土變の弟たちが地方長官を務めた地域で獲得でき、それ以外についても紅河ルートを通じて雲南方面から入手できることを指摘した⁽¹⁶⁾。また、氏は土變の官職や交趾（交州）刺史との関係を検討し、後藤氏の指摘した土着的性格に疑義を呈した⁽¹⁷⁾。たしかに、交州一帯の交易路を巨視的に見れば広東・雲南・中南部ベトナム各方面との接触は無視できないが、土變がそれをどの程度把握したかは別の問題である。

漢代の地域開発についてはジェニファー・ホルムグレン Jennifer Holmgren 氏も人口・行政機構に着目して分析を行い、交趾（交州）では2世紀以降（北方からの）移民によって文化的衝突が生じ、3世紀半ばに反乱と鎮圧、行政機構の再編といった出来事をもたらしたと指摘した⁽¹⁸⁾。また、3世紀半ばの反乱についてはキース・テイラー Keith Taylor 氏も注目し、中国王朝の名義

(13) 前掲論文の他、「後漢書所見越南三郡反乱記事小考（上）：2世紀の越南」（『新潟大学 人文科学研究』33、1967年）・「二世紀の越南」（『史苑』32（2）、1971年）・「交州土着刺史：4・5世紀の越南」（前掲）など。いずれものち同前掲書所収だが、書換え・省略が散見する。本稿では初出・書籍の双方を適宜参照する。尾崎康「後漢の交趾刺史について：土變をめぐる諸勢力」（『史学』33（3-4）、1961年）も参照。

(14) 前掲論文11-18頁。

(15) 「南海交易ネットワークの成立」山本達郎責任編集前掲書、所収。同じ主題について Hoàng Anh Tuấn, *Regionalising National History: Ancient and Medieval Vietnamese Maritime Trade in the East Asian Context*, *The Medieval History Journal* 17（1）、2014: 90-92 も参照。

(16) 「嶺南土氏の勢力形成めぐって」『史観』167、2012年。

(17) 「嶺南土氏交易考」『史滴』34、2012年。

(18) *Chinese Colonisation of Northern Vietnam: Administrative Geography and Political Development in the Tongking Delta, First to Sixth Centuries A.D.* Faculty of Asian Studies and Australian National University Press, 1980: 86.

を借りた点に政治文化の発展が見えるとした⁽¹⁹⁾。

この時期の遺跡・考古遺物は概ね北部ベトナム一帯に所在する。ベトナムでは、つとにダオ・ズイ・アイン Đào Duy Anh 氏が文献を軸とした国家・民族史を著していたが⁽²⁰⁾、以後、中国王朝支配下の社会・経済、地方行政機構と現地社会の接触に関する実証研究は必ずしも多くなかった⁽²¹⁾。20 世紀後半に至り、考古発掘の進展とともに物的証拠と史籍の対応関係に関する検討が発表されるようになった⁽²²⁾、焦点の一つは現在のハノイ（タンロン城・大羅城）に先立つ紅河デルタ地帯の政治拠点の分析・比定であった。本稿で扱う時期については、交趾郡治並びに 3 世紀後半以降の交州刺史治を龍編県とみて、ルンケー遺跡（先述）に比定する西村昌也氏及びファム・レ・ファイ氏の見解が説得的である⁽²³⁾。とはいえ、中国王朝支配下の社会・経済、地方行政機構と現地社会の接触に関しては、実証研究の蓄積はなお十分でなく、考古研究をふまえた史料の見直しが求められる。

以上の通り、先行研究の論点の一つに士燮政権の性格、具体的には政治・経済基盤及び現地社会との関係、もう一つに孫呉時代（3 世紀）における国際関係及び社会・経済状況の変化に集中する。ともに、中国王朝・扶南や林邑などの東南アジア諸国及び現地の社会への目配りが欠かさない問題である。「東アジア」世界の再検討を目指す「東ユーラシア地域論」とは方向性を一にする具体的論点といえよう⁽²⁴⁾。また、「地域」に関しては、南越国以来、南北朝末・隋代に至るまで嶺南・北部ベトナムが一体となった歴史地域を構成したとする指摘もあるが、2-3 世紀については実証を経ない点が残る⁽²⁵⁾。本稿では、こうした課題を踏まえ、第 2 章で士燮の権力の源泉について、第 3 章で孫呉統治期の交州社会について、それぞれ史料の読み直しに基づいて北方・南方との関係及び地域内部における変化の様相を明らかにしていく。

(19) *The Birth of Vietnam*. University of California Press, 1983: 96.

(20) Đào Duy Anh, *Lịch Sử Việt Nam: Từ Nguồn Gốc Đến Cuối Thế Kỷ Mười Chín*. Nhà xuất bản Văn học Thông tin, 1956/2006.

(21) これ以前にはフランス極東学院による墓葬調査、Henri Maspero らの文献研究が知られるが、煩瑣を避け逐一挙げることはしない。藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱：植民地主義時代のフランス東洋学者とアンコール遺跡の考古学』（めこん、2008 年）など参照。

(22) 研究整理・集成として Hà Văn Tấn chủ biên, *Khảo Cổ Học Việt Nam Tập 3: Khảo Cổ Học Lịch Sử Việt Nam*.

Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, 2002; Viện Khảo Cổ Học, *Một Thế Kỷ Khảo Cổ Học Việt Nam* [Tập 1-2].

Nhà xuất bản Khoa học Xã hội, 2004-2005. 遺跡の集成として西村昌也・西野範子『ヴェトナム紅河平原遺跡データ集』文部科学省科学研究費研究報告、2003 年を参照

(23) Đỗ Văn Ninh, *Thành Cổ Việt Nam*. (Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội, 1983) は大羅城（のちタンロン城）以前の古城としてコーロア（Cổ Loa）に注目した。ルンケー遺跡については「羸婁（れんろう）」と同一視する見解も根強かったが、西村昌也（注 10 前掲書）は考古資料の検討、ファム・レ・ファイ（A Reconsideration of the Leilou – Longbian Debate: A Continuation of Research by Nishimura Masanari, *Asian Review of World Histories* 5, 2017）は文献の再検討によって龍編県に比定すべきことを指摘した。

(24) 飯尾秀幸「古代史研究における東ユーラシア地域論をめぐる試案」『古代東ユーラシア研究センター年報』2、2016 年。「東ユーラシア」概念については廣瀬憲雄「『東アジア』と『世界』の変質」（歴史学研究会編『第 4 次 現代歴史学の成果と課題』續文堂出版、2017 年）も参照。

(25) 吉開将人「歴史世界としての嶺南・北部ベトナム：その可能性と課題」『東南アジア 歴史と文化』31、2002 年。1-3 世紀については、反乱の広がりや士燮の勢力圏を取り上げて北部ベトナムから広東方面に至る一体性が見られるとする（87 頁）。

第2章 士燮政権再考

(一) 士氏の年譜と官職獲得の過程

士燮の事績に関する情報源は、『三国志』巻49 士燮伝にほぼ限られる。以下、同書に基づいて士燮の年譜を確認する。それによれば、士氏はもと魯国汶陽の人で、王莽のとき混乱を避けて交州（蒼梧広信）に移り⁽²⁶⁾、士燮の父・士賜は桓帝の時に日南太守となったという。士燮自身は洛陽に遊学して潁川の劉陶の下で左氏春秋を修め、孝廉に推挙されて尚書郎となり、のち巫令（南郡属県）を経て交趾太守に就いた。漢代知識官僚に典型的な経歴といってよいだろう。

交趾太守への着任時期は、川手氏の考証によれば182-184年頃⁽²⁷⁾、黄巾の乱が勃発する直前であった。180年代後半には交州（交趾）一帯でも「(蛮)夷賊」の反乱が発生し、刺史の朱符を殺害するに至った。こうした中、士燮は一族とともに事態を收拾し、おそらくその見返りとして弟の士壹を合浦太守、徐聞令の士範を九真太守、士武を南海太守とするよう朝廷に要請し、認められた。これにより、士氏兄弟は同時に交州（交趾）7郡のうち4郡の長官に就いた。南海太守・士武は早くに死去したが、交趾・合浦・九真の3郡については220年代まで30余年にわたり士氏が地方長官を務めた。なお、このとき鬱林・日南2郡の地方長官は不詳、蒼梧太守は史瓚であった⁽²⁸⁾。

死亡した朱符の後任は南陽の張津であった。在任期間は諸書に混乱が見えるが、『藝文類聚』巻6に引く晋・黄恭『交廣記』⁽²⁹⁾によれば、建安2（197）年に刺史となった張津は交趾太守の士燮とともに、「交趾（部）」を「交州」、刺史を州牧に変更することを申請して認められた⁽³⁰⁾。だが、まもなく張津は部将・区景によって殺害され、折しも蒼梧太守・史瓚も死亡していたことに託け、荊州牧の劉表は独断で零陵の頼恭を張津の後任、呉巨を史瓚の後任として送り込んだ。

この時、士燮が頼恭にどのような態度で臨んだかは詳らかでないが、後漢朝廷とは連絡を取っていたらしく、璽書により綏南中郎将・董督七郡⁽³¹⁾を付与され、また交趾太守職の安堵を受けた。璽書中に「逆賊劉表」とあることに鑑みれば、朝廷による劉表への牽制あるいは対抗措置と考えられる。さらに、その後も後漢朝廷への使者派遣を続けたことに対して安遠將軍・龍度亭侯⁽³²⁾を加えられた。

頼恭は間もなく呉巨と仲違いして追放され、建安15（210）年、長江下流域で勢力を伸ばしつつあった孫権が代わって独自に歩騭を交州刺史に任命する事態となった。呉巨は歩騭に抵抗して

(26) 原文は「至王莽之亂、避地交州」だが、当時の名称は交趾とみられる。

(27) 前掲「嶺南士氏の勢力形成をめぐる」32頁。

(28) 鬱林郡は荊州と接する位置にあり、「夷賊」の反乱がしばしば発生した（『後漢書』列伝20上・楊厚伝、『三国志』巻60 呂岱伝など）。後漢末の時点で行政が機能不全に陥っていたのかもしれない。蒼梧郡は士氏の本籍にあたり、本籍回避により地方長官を出すことは不可能であった。史瓚については不詳。

(29) 年代・撰者の表記は駱偉・駱廷『嶺南古代方志輯佚』（広東人民出版社、2002年）の考定による。

(30) 「建安二年、南陽張津爲刺史、交趾太守士燮表言、伏見十二州皆稱曰州、而交獨爲交趾刺史、何天恩不平乎。若普天之下可爲十二州者、獨不可爲十三州。詔報聽許、拜津交州牧。」

(31) 「董督」は都督に同じく軍政系の官職である（石井仁「都督考」『東洋史研究』51（3）、1992年）。石井氏によれば都督と州牧とは理念において正反対の性格を帯びるものであり（同「漢末州牧考」『秋大史学』38、1992年）、官職の上でも州牧（刺史）・頼恭の存在を相対化することが意図されたのかもしれない。

(32) 西村氏は龍編（龍淵）に関連ある地名の可能性を指摘する（前掲書176頁、注11）。

殺害されたが、士燮は衝突なく歩騭に従い、孫権から左將軍を与えられた⁽³³⁾。さらに士燮は質子の派遣や孫呉の側から蜀漢に対する内乱工作を行うとともに、黄武5（226）年に死去するまで合浦太守・士壹と共に軍馬や珍奇な宝物などを孫権に贈り続けた。こうした貢献に対し、士燮本人には衛將軍・龍編侯、士壹には偏將軍・都郷侯、質子の士廙には武昌太守、南方に残った士燮・士壹の子らには中郎將が、それぞれ加えられた⁽³⁴⁾。

180年代から220年代にかけて、後漢国家は徐々に解体し、地方軍閥が成長する中で曹魏・蜀漢・孫呉の三国が台頭した。こうした中で、以上のように士燮は当初後漢朝廷と継続的に連絡をもち、孫権が勢力を伸ばすと交州刺史を介して服従するなど態度を柔軟に変えた。同時に後漢朝廷と劉表、孫権と曹魏⁽³⁵⁾・蜀漢との対立といった政治情勢を利用し⁽³⁶⁾、地方官職を足掛かりに「董督」・將軍号を受け、親族もそれに準ずる肩書を獲得することで、交州南部（交趾・合浦・九真）を中心に影響力を保持したといえよう。とはいえ、その背景には士燮らが相応の勢力を有していたという積極的要因も考慮しなければならない。次節では、まず経済的側面について実態を分析する。

（二）士氏の経済基盤

従来、士氏の経済基盤に関しては士燮伝中の次の二件が注目されてきた。一つは、

燮の兄弟、並びに列郡と爲り、一州に雄長たり。偏在すること萬里、威尊上無し。出入するに鍾・磬を鳴し、威儀を備具す。箛簫鼓吹、車騎道を滿たし、胡人の轂を夾みて香を焚焼する者、常に有ること數十。（燮兄弟並爲列郡、雄長一州。偏在萬里、威尊無上。出入鳴鍾磬、備具威儀。箛簫鼓吹、車騎滿道、胡人夾轂焚燒香者常有數十。）

として、士燮兄弟が現地で高い権威を誇ったことを描写する文脈で、香を焚く「胡人」が行列に加わっていたとある。もう一件は孫権への贈物であり、注34前掲の通り細葛（葛布）・明珠（真珠）・大貝（タカラガイ）・流離（瑠璃）・翡翠・瑇瑁・犀（角）・象（牙）・蕉（バナナ）・邪（ヤシ）・龍眼（リュウガン）及び軍馬を入手していたことがわかる⁽³⁷⁾。

(33) 孫権から士氏に与えられた將軍号は必ずしも高くないように見えるが、この点には孫呉成立期における孫権自身の肩書との兼ね合いを考慮すべきであろう（石井仁「孫呉政権の成立をめぐる諸問題」『東北大学東洋史論集』6、1995年）。

(34) 「建安末年、燮遣子廙入質、權以爲武昌太守、燮・壹諸子在南者、皆拜中郎將。燮又誘導益州豪姓雍闓等、率郡人民使遙東附、權益嘉之、遷衛將軍、封龍編侯、弟壹偏將軍、都郷侯。燮每遣使詣權、致雜香細葛、輒以千數、明珠・大貝・流離・翡翠・瑇瑁・犀・象之珍、奇物異果蕉・邪・龍眼之屬、無歲不至。壹時貢馬凡數百匹。權輒爲書、厚加寵賜、以答慰之。燮在郡四十餘歲、黄武五年、年九十卒。」

(35) 士燮が交趾太守に赴任した際の交趾刺史は賈琮、2年ほどで丁宮に交代した。丁宮は士壹に目をかけ、自身が中央に転出したのちには辟召しようとした。同人は沛国譙郡の丁氏の出であり、曹操を含む同郡の曹氏とは多重の婚姻関係を通じたコネクションが存在した。士燮と曹操との間にも丁氏を介した連絡の存在が推定される（石井仁『曹操 魏の武帝』新人物往来社、2000年、31-34頁）。

(36) 後漢以来の諸「中央」権力がなぜ交州を放棄しなかったか、という点にも検討が必要であろう。今後の課題だが、珠崖・儋耳2郡の放棄に関する検討（川手翔生「南越の統治体制と漢代の珠崖郡放棄」『史観』174、2017年など）が参考になるだろう。

(37) 『三国志』巻53薛綜伝の上表文（後述）には交州の産物として「名珠・香藥・象牙・犀角・瑇瑁・珊瑚・瑠璃・鸚鵡・翡翠・孔雀」とある。

前者については、既に取り上げた後藤氏・桜井氏のように「胡人」をインド人とする理解がある。たしかに「胡」字は西域・インド方面の事物を指すことが多く、『晋書』巻97林邑伝に「(東晋時代、林邑が)遣使して帝に通表・入貢するに、其の書は皆な胡字なり(遣使通表入貢於帝、其書皆胡字)」と、インド系の文字を指すとみられる例もある⁽³⁸⁾。だが、林邑王が用いた文字が「胡字」と呼ばれたのであれば、「胡人」もまたインドそのものではなく、ベトナム中南部の諸集団に対して明瞭な区別なく用いられた可能性を考慮しなければならないだろう。

一方、士燮・士壹が入手した産品は地方長官としての支配地・内陸交易を通じて獲得可能であって、必ずしも海上遠隔地交易への関与を意味しないことは川手氏が指摘する通りであろう。孫権の任命による交州刺史・歩騭が早い時期に治所を蒼梧広信から南海番禺に移し、城を築くなどしたことから、海上交易の拠点の一つ・番禺は士氏の影響下になかった可能性が高い⁽³⁹⁾。さらに、前掲の「胡人」に関わり、『三国志』薛綜伝にも見える「香藥」(香料)にも注目したい。川手前掲論文は、これについて正確な比定は困難とするが、『太平御覧』巻981香部所引、南朝齊・任昉『述異記』には

日南郡、香市有り、商人、諸もろの香を交易する處なり。南海郡、香戸有り。日南郡、千畝の香林有りて、名香、其の中に出ず。香洲、朱崖郡の洲中に在り(日南郡有香市、商人交易諸香處。南海郡有香戸。日南郡有千畝香林、名香出其中。香洲、在朱崖郡洲中〔出諸異香、往往不知其名〕)。

とあり、士氏支配地域内とその近隣地域で香木が盛んに生産・取引されたことがわかる⁽⁴⁰⁾。

士燮が拠点とした龍編県(交趾郡治、のち交州刺史治)は現在のバクニン省西部、紅河の支流であるドゥオン川 sông Đuống 沿いの自然堤防地帯に位置するルンケー遺跡に比定され、水路を通じてトンキン湾・紅河上流の双方に通じていたと考えられる⁽⁴¹⁾。従って、士燮が交趾郡周辺の物流を押さえたことは充分想定できるが、このことは直ちに海路を通じた遠隔地交易の掌握を意味するわけではない。むしろ、龍編一帯は紅河デルタを含む交州一帯及びその近隣地域にわたる物流ルートにおいて集散地の機能を持ち、士燮に付き従った「胡人」とは商品と共に各地の人々が移住したことを示唆するのではなかろうか。

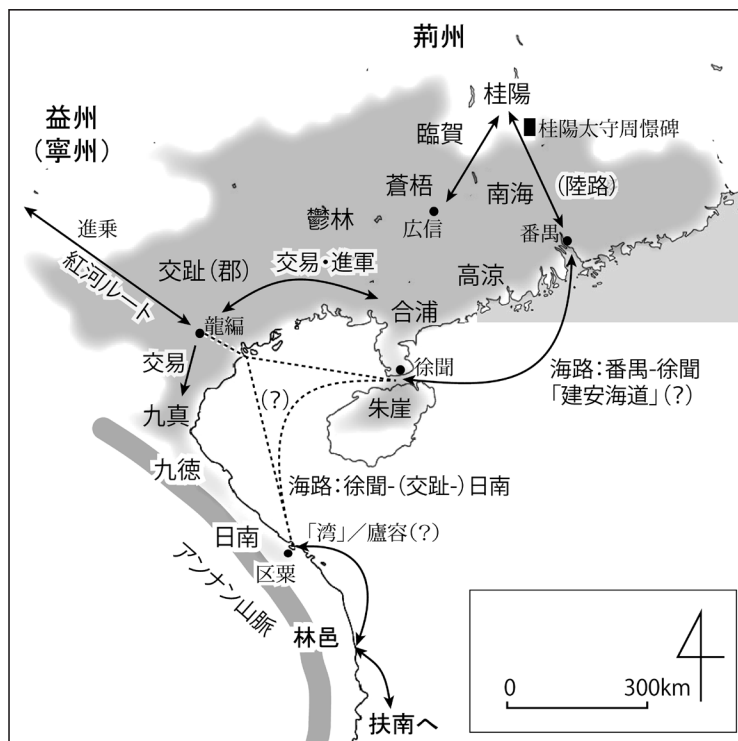
(38) 今のところ最古のチャンパー碑文・ヴォーカイン Vō Cạnh 碑文(カインホア省 tỉnh Khánh Hòa)は3-4世紀前後に比定され、インド系文字・サンスクリット語で刻まれる(Schweyer A-V, Chronologie des Inscriptions Publiées du Campā, *Bulletin de l'École Française d'Extrême-Orient* 86, 1999: 325. 青山亨「東南アジア島嶼部におけるインド系文字」『上智アジア学』20、2002年)。『隋書』巻82林邑伝も「文字同於天竺」とする。

(39) 『晋書』巻15地理志・交州条「(建安)十五年、(刺史)移居番禺」、『水経注』浪水篇「建安二十二年、遷州番禺、築立城郭、綏和百越、遂用寧集。」同様に良港として知られる日南郡についても、士氏が治めた形跡は見えない。

(40) ベトナム西部を南北にはしるアンナン山脈は香木などの森林産物の宝庫であった(山形・桃木前掲論文244-245頁)。交州の九真・日南郡の内陸側にあたる。

(41) 一帯の地理的性格は桜井前掲論文123頁、比定は注23を参照。当時の海岸線に関しては船引彩子氏らの推定が参考になる(Funabiki Ayako, Haruyama Shigeko, Nguyen Van Quy, Pham Van Hai and Dinh Hung Thai, Holocene Delta Plain Development in the Song Hong (Red River) Delta, Vietnam. *Journal of Asian Earth Sciences* 30 (3/4), 2007)。

では、交趾郡がそのような機能を持ちえた理由はどこにあるのだろうか。もちろん、一因は交通路であろう。先述の紅河ルート、トンキン湾から南海・合浦及び(九真・)日南方面⁽⁴²⁾への海路に加え、合浦への陸路⁽⁴³⁾、荊州の零陵郡方面への道路が通じ⁽⁴⁴⁾、交易を行う上で有利な環境にあったことは疑いない【地図2】。



・記載は【地図1】に準ずる。矢印・点線（推定）は本文で言及する交易・進軍などの経路である。なお、図には第3章の内容を含む。

表 1 交趾各郡の戸口数（括弧内は口数を戸数で除した値）

| | 『漢書』巻 28 地理志下（紀元 2 年） | 『統漢志』郡国 5（紀元 40 年） |
|-----|-------------------------|--------------------------|
| 南海郡 | 戸 19,613：口 94,253（4.8） | 戸 71,477：口 250,282（3.5） |
| 蒼梧郡 | 戸 24,379：口 146,160（5.9） | 戸 111,395：口 466,975（4.2） |
| 鬱林郡 | 戸 12,415：口 71,162（5.7） | 戸口数値を欠く。 |
| 交趾郡 | 戸 92,440：口 746,237（8.0） | 戸口数値を欠く。 |
| 合浦郡 | 戸 15,398：口 78,980（5.1） | 戸 23,121：口 86,617（3.7） |
| 九真郡 | 戸 35,743：口 166,013（4.6） | 戸 46,513：口 209,894（4.5） |
| 日南郡 | 戸 15,460：口 69,485（4.5） | 戸 18,263：口 100,676（5.5） |

は米を買入れる意）⁽⁴⁶⁾。士氏が地方長官として長く支配した 3 郡のうち、合浦・九真の 2 郡には穀物を交趾から買い入れた形跡が見える。

以上をまとめると、次のように考えることができる。士燮の拠点となった交趾郡は人口集積地であり、またそれを支える農業生産力を有した。そうした農産物は水陸の交通を通じ、奢侈品との交換によって近隣の交州南部諸郡に移出された。その範囲は概ね士氏が地方長官を務めた行政区と重なる。紅河ルートや海上交通を通じた交易はその外側にも延び、交趾郡に近隣地域の産物及びそれらを運ぶ人々を集めた。

（三）士氏と現地社会

本節では士氏と現地社会との直接的接触を検討するが、はじめに、現地に居住した人々について整理しておく。紅河デルタ一帯における在来の人々に複数の言語集団が存在したことはつとに陳荆和氏が指摘し、西村氏は考古資料を踏まえて、1 世紀以前のデルタ北側には史籍にいう「甌」、南側には「雒（駱）」が居住したことを推定する⁽⁴⁷⁾。2 世紀末までに、さらに近隣地域の商人、入植や流刑による漢系移民が加わったと考えられる⁽⁴⁸⁾。先に取り上げた士燮伝「胡人」のくだりの直前には「（士）燮、體器は寛厚、下士に謙虚にして、中國の士人の往き依りて難を避くる者、百を以て數う」⁽⁴⁹⁾とあり、後漢末の混乱を避けた知識人の避難も増加していたようである。

士燮伝に「震服百蠻」、同書巻 60 呂岱伝に、士氏の影響力に言及して「七郡の百蠻、雲合響應す（七郡百蠻、雲合響應）」とあることは、士氏が上記のような人々に支配を及ぼしたことを示唆するように見える。一方、同書巻 53 薛綜伝には

(46) 同伝には任延が農具もたらして農業を広めたとあるが、後述の薛綜の上表文のように、交州（交趾）一帯の社会習俗は容易に変化しなかったことを伝える史料もある。とくに婚姻制度は、任延が改めたとあるものの、薛綜伝には九真郡内でレヴィレート婚が根強いとの言及があり、「循吏」の政策は暫時のものに過ぎなかったことを想定する必要がある。

(47) 陳荆和「安南訳語の研究 一」『史学』39（3）、1966 年。西村前掲書 136-139 頁。

(48) Holmgren *op. cit.*, P. 86. 片倉穰『ベトナム前近代法の基礎的研究：『国朝刑律』とその周辺』1987 年、風間書房、3-38 頁。

(49) 原文は注 5 を参照。「士人」の実例は張寅瀟「漢末交州流寓士人考析」（『史志学刊』2018 年 1 期）参照。士燮自身の著述業績は『隋書』巻 32・35 経籍志に見える。

九真太守の儋萌、妻の父・周京の爲に主人と作り、並びに大吏を請い、酒酣作樂す。功曹の番歆、起ちて舞い京に屬すも、京は起つを肯んぜず。歆、猶おも迫り彊い、萌、忿りて歆を杖うち、郡内に亡ず。歆の弟の苗、眾を帥いて府を攻め、毒矢もて萌を射、萌、物故するに至る。交趾太守の士燮、兵を遣わして討つを致すも、卒に克つ能わず。(九真太守儋萌爲妻父周京作主人、并請大吏、酒酣作樂。功曹番歆起舞屬京、京不肯起。歆猶迫彊、萌忿杖歆、亡於郡内。歆弟苗帥眾攻府、毒矢射萌、萌至物故。交趾太守士燮遣兵致討、卒不能克。)

と、九真郡の現地有力者の制圧に成功しなかったことが見える。

薛綜は士燮の下に避難した流民の一人であり、のち孫権に仕えた。士燮の没後、孫権は残った士氏一族を排除すべく呂岱を派遣した際に薛綜も同行し、交州南部の鎮定に成功したのち、孫権が呂岱を呼び戻そうとしたことに対し、交州一帯の統治は困難であって、適切な人選が必要なことを上表した。その一部が上の引用箇所である。同じ文章には、朱崖郡での歌垣、交趾郡の麋泠県・九真郡の都龐県でのレヴィレート婚など土着的習俗が根強く、地方長官も認めざるを得ない状態であること、漢代以来地方長官の人選や徴税はルーズであったことも述べられている⁽⁵⁰⁾。政治的意図を含んだ記述である点に注意を要するが、薛綜自身の見聞・経験を反映する点で信憑性は高いだろう。

このように交州一帯の地方行政に粗放な側面があったとすれば、士燮の影響力はどのように構成されたのだろうか。ここで注目したいのは士燮の子・士徽の呂岱に対する対応に関する記事である。

(孫権は)陳時を遣わし燮に代えて交趾太守と爲す。(呂)岱は南海に留まり、(戴)良は(陳)時と俱に前行して合浦に到るに、燮の子の徽、交趾太守を自署し、宗兵を發して良を拒み、良は合浦に留まる。交趾の桓鄰は、燮の舉吏なり。叩頭して徽を諫め良を迎えしめんとするも、徽怒り、鄰を笞殺す。鄰の兄の治・子の發、又た宗兵を合して徽を撃ち……。 (遣陳時代燮爲交趾太守。岱留南海、良與時俱前行到合浦、而燮子徽自署交趾太守、發宗兵拒良、良留合浦。交趾桓鄰、燮舉吏也。叩頭諫徽使迎良、徽怒、笞殺鄰。鄰兄治子發又合宗兵擊徽〔、徽閉門城守、治等攻之數月不能下〕。)

士徽を交趾郡から切り離す人事に対し、同人は「宗兵」(同族からなる私兵⁽⁵¹⁾)を動員して合浦からの南下を阻んだ。しかし、孫権に従うよう諫めた郡吏を殺害したことから、その遺族も「宗兵」を動員し、内紛を生じた。桓氏はおそらく前掲史料の九真郡功曹を出した番氏と同様に現地の有力者であろう。ここから、士燮は、交趾郡ではこうした人々を郡吏として取り込み、同族関

(50)「自臣昔客始至之時、珠崖除州縣嫁娶、皆須八月引戸、人民集會之時、男女自相可適、乃爲夫妻、父母不能止。交趾麋泠・九真都龐二縣、皆兄弟妻其嫂、世以此爲俗、長吏恣聽、不能禁制。……然而土廣人眾、阻險毒害、易以爲亂、難使從治。縣官羈縻、示令威服、田戸之租賦、裁取供辦、貴致遠珍名珠・香藥・象牙・犀角・瑇瑁・珊瑚・琉璃・鸚鵡・翡翠・孔雀・奇物、充備寶玩、不必修其賦入、以益中國也。然在九甸之外、長吏之選、類不精覈。漢時法寬、多自放恣、故數反違法。」

(51)『資治通鑑』魏文帝黃初七(226)年条・胡注「自漢末之亂、南方之人、率宗黨相聚爲兵、以自衛。」

係を基盤とする私兵集団を動員しえたこと、また士氏自身も宗兵を保有したことが読み取れるだろう。

以上をまとめると、史料から確認できる限り、士燮の影響力とは①漢人知識層に対する士燮個人の名声、②士氏の私兵、③地方長官として有力な移民・原住民を任用すること、④郡吏らを介してその同族集団・私兵を動員することを集積したものであったと考えられる。①－④が地方行政制度や個人的関係に立脚することに鑑みれば、士氏が交州（交趾）七郡や「百蠻」の全体に対して実効支配を行った、また郡内に対して個別人身支配の把握を貫徹したとは考えにくい。交州（交趾）南部の複数郡において、私兵集団や在地有力者を介して政治権力を形成し、交易の管理を行ったとみるのが実態に近いのではなかろうか。

第3章 孫呉政権の交州統治

（一）孫呉の南方政策

226年に士燮が死去すると、孫権は残った士氏を排除し、交州の直接統治に乗り出した。まず交趾郡の太守として陳時を任命し、士燮の子・士徽は九真太守とした。同時に、交州のうち士氏の影響力が比較的弱い合浦以北を広州として切り離し、交州・広州のそれぞれに刺史を派遣した（ただし、士氏が滅ぶと間もなく交州一州に戻された）。士徽が反発して合浦・交趾両郡の境を封鎖したこと、諫めた郡吏を殺害したために内紛が発生したことは既に述べた。交趾郡の内紛は程無く収まったが、広州刺史の呂岱は旧知であった士壹の子・士匡に降伏するよう書簡を送り、結局、士徽ら兄弟は呂岱を迎え入れた。呂岱は士徽を斬って首を武昌に送り、士壹・士翯・士匡・士廩らは罪を許されたものの庶人に落とされた。のち、士壹・士翯は法に座して誅殺された。呂岱は薛綜らを従えて九真方面にも遠征を行い、さらに従事を扶南・林邑・堂明の各国に派遣した。諸国からは孫権に向けて遣使奉貢が行われ、呂岱は一連の功績により番禺侯・鎮南將軍を受けた。

孫権が交州の直接支配に乗り出した要因は、三国の拮抗関係を背景に、南方の物流・交通網を掌握することにあつたと考えてよいだろう⁽⁵²⁾。これを裏付けるのが赤烏5(242)年に行われた珠崖・儋耳の征討と郡の設置である⁽⁵³⁾。両郡は現在の海南島に比定され、交州の主要な海港である徐聞（合浦郡）の対岸にあたるが⁽⁵⁴⁾、前漢時代以来放棄されていた。南海番禺は220年代以来孫権の任命に係る交州刺史の管理下にあつたから、士氏の排除と呂岱の遠征と併せて海南島を征服することで、合浦・日南に至る海上交通路を手中に収めたと考えられる。

さらに、海路を通じて東南アジア諸国との関係を樹立することも企てられた。渡部武氏によれば東南アジア諸国に対する使節派遣の拠点は日南郡の盧容浦であり、現トゥアティエン＝フエ

(52) 菊地大「孫呉の南方展開とその影響」竹内洋介・大室智人編『『華陽国志』の世界：巴、蜀、そして南方へのまなざし』東洋大学アジア文化研究所、2018年、所収、22-26頁。

(53) 『三国志』巻47 呉主孫権伝・赤烏五年条「秋七月、遣將軍聶友・校尉陸凱以兵三萬討珠崖・儋耳。」同書巻61 陸凱伝「赤烏中、除儋耳太守。討朱崖斬獲有功、遷爲建武校尉。」

(54) 『水経注』巻36 温水篇「(朱崖・儋耳二郡)大海中、南極之外、對合浦徐聞縣。清朗無風之日、逕望朱崖州、如困廩大。從徐聞對渡、北風舉帆、一日一夜而至。」

Thừa Thiên-Huế のラグーンに比定される⁽⁵⁵⁾。230-240 年代にかけて孫呉政権が対外積極政策を取ったことは菊地大氏が指摘する通りであり、これに対し、例えば扶南王・范旆は赤烏 2 (239) 年に楽人と貢物を送ったという⁽⁵⁶⁾。孫呉時代に派遣された使節の記録を利用したとみられる『梁書』巻 48 扶南伝の記事によれば、范旆の先代・范師蔓 (范蔓) はメコンデルタの開発と共にタイランド湾・マレー半島方面の諸港市を影響下に収めて強大化した。沿岸を辿ってインド (天竺) とも交通があったという⁽⁵⁷⁾。

だが、こうした対外積極策の一方で、赤烏 11 (248) 年には林邑との激しい武力衝突、交趾・九真一帯の反乱が同時に発生した。①『水経注』巻 36 温水篇・②『三国志』巻 61 陸胤伝及び③『太平御覧』巻 371 所引、西晋・劉欣期『交州記』にはそれぞれ

- ①呉の赤烏十一年・魏の正始九年、交州、林邑と灣に大いに戦い、初めて區粟を失うなり。(呉赤烏十一年・魏正始九年、交州與林邑于灣大戰、初失區粟也。)
- ②赤烏十一年、交趾・九真の夷賊、城邑を攻没し、交部騒動す。(陸)胤を以て交州刺史・安南校尉と爲す。胤、南界に入りて、諭すに恩信を以てし……。 (赤烏十一年、交趾・九真夷賊攻没城邑、交部騒動。以胤爲交州刺史・安南校尉。胤入南界、諭以恩信、[務崇招納、高涼渠帥黃呉等支黨三千餘家皆出降。……交域清泰。])
- ③趙姬は九真、軍安縣の女子なり。……入山して群盜を聚め、遂に郡を攻む。……刺史呉郡の陸胤、之を平らぐ。(趙姬者、九真軍安縣女子也。……入山聚群盜、遂攻郡。……刺史呉郡陸胤平之。)

とある。區粟はのちにも南朝と林邑が激戦を繰り広げた地で、現在のフエ市 (盧容浦の山側) に比定される⁽⁵⁸⁾。この背景について菊地大氏は、林邑が南海交易利権の確保と孫呉・扶南の連携の切り崩しを意図したとするが⁽⁵⁹⁾、では交州の反乱との連動は単なる偶然であろうか。節を改めて当時の林邑の実態を検討し、一連の武力衝突の背景を今少し詳しく考えてみたい。

(55) 渡部武「朱応・康泰の扶南見聞録輯本稿：三国呉の遣カンボジア使節の記録の復原」『東海大学紀要 文学部』43、1985 年、23 頁。なお、同論考が指摘する通り、孫呉による南海への使節派遣は数次にわたって行われたのであろう (10-12 頁)。

(56) 菊地大「孫呉政権の対外政策について：東アジア地域を中心に」『駿台史学』116、2002 年。ただし、同論考では主に公孫氏・高句麗・「倭」との関係が検討される。『三国志』呉主孫権伝・赤烏六年条には「十二月、扶南王范旆遣使獻樂人及方物」とある。

(57) 「盤盤立三年死、國人共舉 (范) 蔓爲王。蔓勇健有權略、復以兵威攻伐旁國、咸服屬之、自號扶南大王。乃治作大船、窮漲海、攻屈都昆・九稚・典孫等十餘國、開地五六千里。……蔓姊子旆、時爲二千人將、因篡蔓自立、遣人詐金生而殺之。」同卷中天竺国伝「唯呉時扶南王范旆遣親人蘇物使其國、從扶南發投拘利口、循海大灣中正西北入歷灣邊數國、可一年餘到天竺江口、逆水行七千里乃至焉。」石澤良昭「カンボジア平原・メコンデルタ」(山本達郎責任編集前掲書所収)、180-182 頁も参照。

(58) ただし『水経注』巻 36 の引く『林邑記』に「區粟建八尺表、日影度南八寸」とあることから、Rolf Alfred Stein は北緯約 17 度 58 分と推定し、より北のクアンビン Quảng Bình に比定する (フエ市は同約 16 度 46 分。Stein R. A., Le Lin-Yi 林邑, *Han Hiue [Bulletin du Centre Sinologiques de Pekin] II, fascicules 1-3, 1947: 17*)。

(59) 菊地前掲「孫呉の南方展開とその影響」32-33 頁。同「孫呉・東晋と東南アジア諸国」鈴木靖民・金子修一編『梁職貢図と東部ユーラシア世界』勉誠出版、2014 年、所収、373 頁。

(二) 林邑と交州

林邑の成立に関しては、史料によってやや齟齬がある。『水経注』巻36温水篇所引『林邑記』佚文が「國、文史無く、其の纂代を失う（國無文史、失其纂代）」とするように正確な記録が存在しなかったようで、「区連」を「区逵」に作る文献、2世紀前半の「区憐」同一視するものもある。『林邑記』佚文・『梁書』林邑伝を基本に再構成すると、区連の直系は間もなく途絶え、3世紀後半には外孫（または甥）の范熊が王位を奪い、4世紀後半に子の范逸が世襲した。西晋の愍帝（位313-317）の頃、日南郡の夷帥・范椎の奴であった范文が城郭の設計などを伝え、330年前後に范逸が死去すると范文が王位を篡奪した⁽⁶⁰⁾。

『晋書』巻97林邑伝は「孫權より以來、中國に朝さず、武帝の太康中に至り、始めて來りて貢獻す（自孫權以來、不朝中國、至武帝太康中、始來貢獻）」とあり、政治的接触には乏しかったようである。一方、『水経注』巻36温水篇所引『林邑記』佚文に

（范）椎、嘗て（范）文をして遠行して商賈せしめ、北して上國に到り、多く聞見する所あり。
（西）晋の愍帝の建興中を以て、南して林邑に至り、王・范逸に城池を制造し、戎甲を繕治し、廓略を経始するを教う。（椎嘗使文遠行商賈、北到上國、多所聞見。以晋愍帝建興中、南至林邑、教王范逸制造城池、繕治戎甲、經始廓略。）

と、日南郡西捲県の首領・范椎が通商のために范文を南北双方に派遣したとある。

日南郡・林邑が所在した中部ベトナムは東側に河口・ラグーン、僅かな平地の西側にアンナン山脈がそびえる地形であり、可耕地はごく限られる。林邑王権の実態は川筋に沿って形成された権力の連合体であったともされ⁽⁶¹⁾、范椎もこうした首長の一人であったのかもしれない。東晋時代には、交州刺史・日南太守の汚職に加えて農地不足を理由として林邑が交州に攻め寄せたという⁽⁶²⁾。一帯では、范文のように南北を往来しながら、つまり呉（交州）との境界をこえて商品の中継及び森林産物の移出に従事し、農産物等を獲得することが行われたと考えられる。

同様に、扶南をはじめタイ・マレーからインド方面の港市とも交易が行われ、こうした商品・商人の移動と共に文化が伝播したと考えられる。ミーソン遺跡の造営や范文による技術の導入、また、区連から范熊の時代には正確な記録が残らなかったように、文字文化が未発達であったのに対し、4世紀以降、碑文や「胡字」を用いた国書が記されたのはその例であろう⁽⁶³⁾。

以上のような林邑のありかた、とくに交易を通じた南北との交流に鑑みれば、日南以北の交州各郡、すなわち交趾・合浦・朱崖・番禺などの海港は林邑の海上交易に重要性を持ったと推定で

(60) 「范」字は扶南王にも見えるが、漢風の姓とは限らず、Stein が想定するように母系氏族名の可能性もある (Stein op. cit., 256-258)。

(61) 桃木至朗・樋口英夫・重枝豊『チャンパ：歴史・末裔・建築』めこん、1999年、32-40頁。

(62) 『晋書』林邑伝「初、徼外諸國嘗齎寶物自海路來貿貨、而交州刺史・日南太守多貪利侵侮、十折二三。至刺史姜壯時、使韓戢領日南太守。戢估較太半、又伐船調枹、聲云征伐、由是諸國悲憤。且林邑少田、貪日南之地、戢死絕、繼以謝擢、侵刻如初。」

(63) 林邑の「インド化」については桃木・山形前掲論文243-247頁を参照。

きる。とくに林邑にとっては、交州方面の農産品との取引が意味を持った可能性がある。すると、中国王権が交州一帯への関与を強め、交易の管理に乗り出したことは、林邑の側から見れば自国経済の一面を支える通商への制約を意味したであろう。さらに、林邑が交州から扶南にかけて交易活動を展開していたとすれば、孫呉が対外積極策をとって日南郡から扶南方面に乗り出したことで、林邑の交易圏との競合関係が生じたとも考えられる。

孫呉の政策とは、基本的に健康を拠点とする孫氏政権とその有力者の意向によって決定されたものであることは言うまでもない。南方への進出に関していえば、曹魏への対抗という意識も働いたであろう。だが、そうした政策は北中部ベトナム一帯の現地社会とその生業に対しては衝突や競合を生じさせるものであったとみられる。3世紀中盤の交州における反乱・林邑との衝突について原因を明言する史料には乏しいが、政治勢力の領域・境界とは必ずしも一致しない形で現地の経済的連携が形成されていたことが背景となった可能性には留意が必要だろう。

(三) 呂興の「反乱」と広州の分離

赤烏 11 (248) 年の事件以後、260 年代まで北中部ベトナム一帯での武力衝突は史料上に見えない。嶺南方面でも、赤烏 2 (239) 年に、臨賀郡で平南將軍を自称した廖式が零陵・桂陽・蒼梧・鬱林一帯を動揺させたのち、同種の事件は史籍に見えない。廖式に対しては、前出の呂岱が、既に高齢ながら交州牧として出動し、鎮圧した。呂岱は事態を収束させたのち武昌に戻り、248 年に交州刺史となった陸胤も永安元 (258) 年には西陵督に転出していた。

孫呉の永安五 (262) 年、孫休は察戦なる官を交趾に派遣し、孔雀と大猪を調達させた。当時の交趾太守・孫讃は以前に郡内の工人千余人を徴発して建業に送ったことがあり、察戦が訪れたことで、現地では同様の徴発が危惧された。翌年、郡吏の呂興は孫讃を殺害し、社会不安に乗じて郡内の人々や諸夷とともに孫呉に対する反乱を起こした。同年、鄧艾・鍾会の遠征によって蜀漢が減じ、四川・雲貴一帯は曹魏の支配下に入ったことから、呂興は南中（雲南・貴州）を通じて曹魏に使者を送り、臣従の態度を示して支援を要請した。

ここで注意したいのはそれぞれの反乱の範囲である。248 年の武力衝突は交趾・九真・日南一帯で発生し、背景に現地の経済的接続が想定されることは前節に述べた。239 年の事件は臨賀郡（孫呉のとき蒼梧郡を割き建郡）から荊州南部（零陵・桂陽）・交州北西部（蒼梧・鬱林）に広がった。注 44 の通り、蒼梧・鬱林一帯と荊州南部との間には山路ではあるにせよ交通があった。さらに、呂興の「反乱」は交趾郡で発生し、九真（・日南）に拡大して合浦を窺い、進乘県（雲南省馬関県・河口やオ族自治県一帯）を通じて曹魏（のち西晋）に連絡をとった⁽⁶⁴⁾。呂興自身は間もなく郡功曹に殺害されたが、南中地域の有力者を援軍に得た反呉勢力は北上して 268 年に劉峻・

(64) 『三国志』巻 4 陳留王（奂）紀・咸熙元年条「（九月）辛未、詔曰「……呉將呂興因民心憤怒、又承王師平定巴蜀、即糾合豪傑、誅除句等、驅逐太守長吏、撫和吏民、以待國命。九真・日南郡聞興去逆即順、亦齊心響應、與興協同。興移書日南州郡、開示大計、兵臨合浦、告以禍福。遣都尉唐譜等詣進乘縣、因南中都督護軍霍弋上表自陳。」……其以興爲使持節都督交州諸軍事・南中大將軍・封定安縣侯（、得以便宜從事、先行後上。）」策命未至、興爲下人所殺。」ただし、日南郡に対する影響力の実効性は、菊地前掲「孫呉・東晋と東南アジア諸国」に鑑みれば疑問無しとせず、誇張の可能性もある。

脩則が指揮する孫呉側の遠征軍を破り、鬱林郡に進出した⁽⁶⁵⁾。

このように、263 年においても 248 年と同様に交趾郡を含む反乱はまず北部ベトナム一帯に広がり、その後、紅河ルートを遡る形で曹魏（西晋）に使者を派遣した。他方、臨賀郡で発生した事件の場合は荊州方面に広がる一方で交州への拡大は北西部に留まった【地図 2】。ごく大雑把な傾向ではあるが、荊州南部と交州北部（嶺南方面）、交州南部（北部ベトナム方面）がいわばブロックを成したことがわかる。結果的に、こうしたブロックは州として制度化された。というのも、劉峻・脩則の派遣に先立ち、孫呉は反乱発生を受けて永安 7（264）年に合浦以北に広州を再設置し、士氏を排除した時と同様の措置をとったからである。嶺南・北（中）部ベトナムを別個の行政区に編成する体制は西晋以後の王朝にも継承され、後者の空間は唐代の安南都護府を経て大越国へと繋がっていった。

交州での対呉反乱は 10 年近く持続し、一時は西晋が交趾太守・楊稷など交州（もと交州南部）諸郡の地方長官を任命するに至った。孫呉の建衡元（269）年、孫皓は監軍の虞汜・威南將軍の薛瑒及び蒼梧太守の陶璜を荊州から、監軍の李勣・督軍の徐存を建安海道から派遣し、合浦で合流して交趾へと遠征させた。蒼梧太守が加わっていることから、荊州とは零陵・桂陽から蒼梧・鬱林へのルートとみられる。建安海道は不詳だが、江蘇・浙江方面から合浦に至る海路であろうか。いずれにせよ、李勣・徐存は途中で無断撤退したために誅殺され、荊州方面の部隊のみ、建衡 3（271）年に交趾に達して西晋に付く勢力を破った。

このときの経緯は『三国志』・『晋書』の他、『華陽国志』巻 4 南中志にも

（西晋）泰始七（271）年春、呉王の孫皓、大都督の薛瑒・交州刺史の陶璜を遣わして軍を帥い、扶巖の惡夷を興して合すること十萬もて、交趾を伐たしむ。（楊）稷、晃及び將軍・建寧の孟岳等を遣わして之を禦ぎ、封溪に戦う。眾寡敵せず、晃等、敗績し、僅かに身を以て交趾に還り、城を固めて自守す。……陶璜、之を圍む。蹊徑を杜塞し、救援至らず。……交趾の人・廣野將軍の王約、反きて陶璜に應じ、梯を以て外を援く。呉人、遂に入城するを得。（泰始七年春、呉王孫皓遣大都督薛瑒・交州刺史陶璜帥軍、興扶巖惡夷、合十萬、伐交趾。稷遣晃及將軍建寧孟岳等禦之。戰於封溪。眾寡不敵、晃等敗績。僅以身還交趾、固城自守。……陶璜圍之。杜塞蹊徑、救援不至。……交趾人廣野將軍王約、反應陶璜、以梯援外。呉人遂得入城。）

とある。虞汜・薛瑒は長期の遠征の中で相次いで死亡しており、結局交趾の「平定」まで指揮を執ったのは陶璜であった。『華陽国志』が伝えるように、陶璜は「扶巖」なる原住民集団を味方に引き入れて楊稷らを破り、さらに九真・日南方面にも遠征を行って交州（交趾・九真・日南一帯）を再征服した。

(65) 『華陽国志』巻 4 南中志「咸熙元年、呉交趾郡吏呂興殺太守孫靖（譚）、内附魏。魏拜興安南將軍。時南中監軍霍弋、表遣建寧蠻谷為交趾太守、率牙（衙）門將建寧董元・毛晃・孟幹・孟通・蠻熊・李松・王素等、領部曲以討（援）之。谷未至、興已為功曹李統所殺。……呉交州刺史劉峻・大都督脩則領軍、三攻稷〔楊稷〕、皆為稷所敗。鬱林・九真皆附稷。稷表遣將軍毛晃・董元等攻合浦。戰於古城、大破呉軍殺峻・則。」

四 陶璜の統治をめぐる

陶璜は交州一帯を孫呉の支配下に取り戻したのち、郡県機構を再編して統治機構を立て直したが⁽⁶⁶⁾、その際、郡県の把握下に置かれた人々には原住民も含まれた⁽⁶⁷⁾。その背景として、『晋書』本伝に挙がる次の挿話は興味深い。

（広州刺史・）滕脩、數しば南賊を討つも制する能わず。璜曰わく、「南岸は吾が鹽鐵を仰ぐ。斷ちて與に市する勿からば、皆な壞して田器を爲らん。此くのごとくすること二年せば、一戰にして滅ばすべきなり」と。脩之に従い、果たして賊を破る。（滕脩數討南賊、不能制。璜曰、「南岸仰吾鹽鐵。斷勿與市、皆壞爲田器。如此二年、可一戰而滅也。」脩從之、果破賊。）

ここからは、陶璜が現地の生業・経済に対して洞察を有したことがわかる。『晋書』の言うように、これによって「能く人心を得」たとすれば、「夷」を支配下に組み入れた背景にも同様の事情を推定できるだろう。

さらに、林邑との関係の改善もこれに関連する可能性がある。孫呉時代以来対立関係にあり、朝貢も行わなかった林邑は、西晋の太康3（または4、282または283）年に西晋の武帝に紫水晶の唾壺など貴重な宝物を贈った。このことは『晋書』の他、『太平御覽』巻703他に引かれる『交州雜事』佚文に見え、同書は主に士燮・陶璜の事績を記したとされるから⁽⁶⁸⁾、陶璜の貢献があったことは疑いない。240年代における対孫呉関係悪化の背景に交通・経済をめぐる対立があったとすれば、陶璜がそれを把握して事態を改善したことが想定できる。

いずれにせよ陶璜が現地の人々から信頼を得て、長官として長く現地に留まったことは確かである。孫呉時代に転任が検討された際には現地から留任の請願が起り、孫呉滅亡時（280年）には西晋武帝から広州刺史の滕脩とともに引き続き長官を務めるよう指示を受けた。本伝記載の数字によれば30余年、4世紀初頭頃まで地方長官を務めて現地で死去したという。

以上のことから、陶璜の統治には現地の社会・経済に対する配慮が含まれ、地方行政の再編成や運営にも反映されたと思われる。現地では、郡吏の呂興が反乱の際に曹魏に使者を送って「使持節都督交州諸軍事・南中大將軍」を求め、あるいは陶璜の九真征討の際に九真郡功曹の李祚が、陶璜に従う舅・黎晃に対して「舅、自ら呉將たり。祚、自ら晉臣たり」と述べたように、中国的政治文化に順応を見せる有力者が出現していた⁽⁶⁹⁾。長期にわたる安定的統治及びその結果として

(66) 『晋書』巻57 陶璜伝「武平・九德・新昌土地阻險、夷獠勁悍、歷世不賓。璜征討、開置三郡、及九真屬國三十餘縣。」また湖南省衡陽市に現存する谷朗碑はこの時期の九真太守の墓碑である（拓本・録文は伏見仰敬『呉谷朗碑・禪国山碑』二玄社、1969年）。

(67) 『三国志』巻48 三嗣主孫皓伝・建衡三年条「是歲、汜・瑁破交趾、禽殺晉所置守將。九真・日南皆還屬。大赦、分交趾爲新昌郡。諸將破扶嚴、置武平郡。」『宋書』巻38 州郡志・交州条「武平太守、呉孫皓建衡三年討扶嚴夷、以其地立。」『水經注』溫水篇所引『交州外域記』「九德縣屬九真郡。在郡之南、與日南接。蠻盧蠻居其地、死、子寶綱代、孫黨、服從吳化、定爲九德郡、又爲隸之。」

(68) 『隋書』巻33 經籍志「交州雜事九卷。記士燮及陶璜事。」

(69) 『晋書』陶璜伝「九真郡功曹李祚保郡内附、璜遣將攻之、不克。祚舅黎晃隨軍、勸祚令降。祚答曰「舅自呉將。祚自晉臣。唯力是視耳。」踰時乃拔。」注(19)も参照。

の立碑顕彰・後代の土着祭祀につながる歴史的記憶（第1章参照）の背景には、有力者層を取り込み、また林邑の成長など地域環境の変化に対応して現地社会の安定を実現したことがあったのではなかろうか。

おわりに

まず、第2・3章で述べた事柄を簡単に振り返っておく。士燮の権力については、一方に後漢の分裂・諸勢力の抗争という事情、他方に交趾（交州）南部の地域経済を利用した側面があることを指摘した。交趾郡一帯に南北から人々が移り住み、多元的な社会を形成するなかで、士燮自身の声望や地方官としての権力、同族結合などを利用して現地社会に対する影響力を構築したと考えられる。士氏を排除した孫呉は交州の直接統治に乗り出したが、成長しつつあった林邑との衝突に至った。この頃までに交州一帯では、荊州南部に連なる北部・南中及び林邑との関係が深い南部の分極が顕在化していた。孫呉末期の反乱対応によってこうした状況は行政区に反映され、陶璜が現地社会の実態に応じた統治を実現し、長期にわたり地方統治を行ったことで、従来の交州を広・交二州に分かつ体制が固定化していった。

ここから理解できることの一つは「国境」を超えた経済の接続である。交州（交趾）南部の経済は各郡で完結するのではなく、周辺の郡、さらに州・国家の境域の外側に通じていた。とくに南方に対してはヒトやモノが行き交うフロンティアの性格を持ったと考えられる⁽⁷⁰⁾。事情は林邑（あるいは扶南などの港市）も同様であっただろう。この点からは「中国」（「東アジア」）の辺境と「東南アジア」とのつながりを読み取ることができるだろう。

また、本稿で扱った時期を通じて中国王朝の態度に変化が見られる点も指摘しておきたい。漢代のルーズな南方支配は、孫呉の交州進出及び林邑・扶南との接触を経て、西晋における陶璜の交州統治と林邑との朝貢関係樹立に至った。一面では王朝側の政治関係・政治理念といった事情もあっただろうが、同時に、現地への接触を強めるなかで実態に即した対応が模索されたとも考えられる。広・交二州の分離に象徴される地方行政の再編についても、現地の交流圏が反乱の広がりやに反映し、それを受けて州が再設定されたのであれば、地域的一体性を追認する形で行政区の組替えが行われたといえる。

以上のように、2-3世紀における交州地域史には、一面で中国史・東アジア史に留まらない広がりやを有すること、もう一面でローカルな一体性の存在が見て取れる。こうした点で、「東ユーラシア」的視野、及び「地域論」による分析が有効性を持つといえよう。ただし、本稿では交州一帯における仏教の伝来と受容⁽⁷¹⁾、北方（漢）系文化の伝播及び「土王」言説に見えるような後代の認識を再検討するには至らなかった。また、交州－林邑・扶南の社会・政治的發展については、楽浪郡－「韓」・「倭」など同時期の他地域と比較して考えることも可能だろう。これらの検討は今後に残された課題である。

(70) ブルース・バートン 「「境界」とは何か：理論的考察の試み」 村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』山川出版社、1997年、所収。

(71) 飯尾秀幸氏は、仏教が「東ユーラシア」世界の共通項となりうることを指摘する（前掲論文89頁）。

【付記】

- (1) 本稿は、2018年11月17日に専修大学神田キャンパスで行われたシンポジウム「東ユーラシア地域論の現在－交流・交易からみた北と南－」での報告をもとに、当日の質疑・討論などで頂いたコメント・ご意見・ご質問を反映して修正・再構成を行った。ご指摘を下された皆様に感謝申し上げます。
- (2) 本稿の一部には、筆者がシンポジウム報告後にベトナム・ハノイ、社会科学図書館 *Thư viện Khoa học xã hội* 及び漢喃研究院図書館 *Thư viện, Viện nghiên cứu Hán nôm* で行った史料調査を反映した。調査にご協力・ご助言を賜った方々に感謝申し上げます。
- (3) 本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費（17J03291）による成果の一部である。